

「約心」ということ

中原 健 二

はじめに

宋末元初の人、趙文（一二三九—一三一五）に「約心堂記」（『青山集』卷三）という一文があり、次のように始まる。

彭君秉周、取昌黎復志賦語、名其讀書之所曰約心、余問於秉周曰、子知昌黎復志賦之所由作乎、子樂甚、昌黎何能及也

（彭君秉周、昌黎の復志賦の語を取りて、其の讀書の所を名づけて約心と曰う。余秉周に問いて曰く、子は昌黎の復志賦の由りて作る所を知るか。子が楽しみは甚し、昌黎何ぞ能く及ばん、と）

知人の彭秉周（未詳）がその書齋を韓愈の「復志賦」の語に因んで「約心堂」と名付けたので、趙文は、韓愈が「復志賦」をなぜ作ったかを分かっているのか、君は韓愈よりずっと楽しい境地に居るではないか、と秉周に問うたというのである。しかし、秉周はその質問の意圖が分からない。そこで、趙文は説明を加えた。

秉周末達、余曰、復志賦之作也、昌黎從隴西公於宣武、意必有不得以行其志者、故其爲此賦。自述平生嶽寄歷落、無所不至、其詞大槩嫉貪佞之汙濁、懲此志之不修而曰、苟不内得其如斯兮、孰與_レ不食而高翔

(乗周末だ達せざれば、余曰く、復志賦の作るや、昌黎隴西公に宣武に従い、意は必ず以て其の志を行うを得ざる者有れば、故に其れ此の賦を爲れり。自ら平生の嶽寄歴落たるを述べて、至らざる所無し。其の詞は大槩貪佞の汗濁を嫉み、此の志の修めざるを懲らしめて曰く、苟も内に其の斯くの如きを得ずんば、食らわずして高く翔くるに孰與れぞ、と)

韓愈の「復志賦」は貞元十三年、韓愈三十歳の作で、「愈既に隴西公の汴州を平らぐるに従い、其の明年七月に負薪の疾有れば、居に退休して、復志賦を作れり。其の辭に曰く」と始まる。隴西公は、宣武軍節度使の董晉。韓愈は辟召されてその觀察推官となつたが、病を得て退居していたときにこの賦を作つたという。韓愈は賦の本文で董晉の幕下に官を得るまでの道程を振り返るのだが、趙文の記に「自ら平生の嶽寄歴落たるを述べて、至らざる所無し」というのがそれであり、さらに、「復志賦」の制作意圖は「其の詞は大槩貪佞の汗濁を嫉み、此の志の修めざるを懲らしめるにある」と言う。これは「復志賦」の結尾の部分、

昔余之約吾心兮、誰無施而有獲、嫉貪佞之滯濁兮、曰吾其既勞而後食、懲此志之不修兮、愛此言之不可忘、情惓惓以自失兮、心無歸之茫茫、苟不內得其如斯兮、孰與不食而高翔を踏まえているのだが、趙文は次いで、そこに見える「約心」の語に言及する。

吾然後知昌黎之所謂約心也、君子讀書爲士、莫不各有一初心、自古聖賢出處、此身可困可辱、而不可以負吾心之約、負約於人、猶曰不信、吾與吾心言矣、能愛富貴而食言乎

(吾然後に昌黎の所謂約心を知れり。君子は讀書して士と爲り、各々一初心有らざる莫し。古自り聖賢の出處するは、此の身は困しむ可く辱む可きも、以て吾が心の約に負く可からず。約に人に負くは、猶お不信と曰う。吾は吾が心と言えり、能く富貴を愛して食言せんや)

趙文は「復志賦」中の「約心」を、「心に約す」、すなわち「心と約束をする(「心に誓う」と

言い換えてもよいかも知れない」と解していると考えられるのだが、そのことはさらに記の末尾で、

君讀書爲士之初、所以與此心約者何事、豈非欲爲聖爲賢、豈非欲窮則獨善其身、達則兼善天下、今雖未得以遂兼善之願、豈不可以如獨善之約、願君夙夜無負斯約也、與心約而負之、對鏡窺影、必有覩然于其面目者、此卽我心之責也、今世纍纍若若、決非我與秉周所可徒手得、幸而得之、必有負其初心者、故不爲秉周願之也、秉周起謝曰、如約、遂書以爲記

（君の讀書して士と爲りしの初め、此の心と約せる所以の者は何事ぞ。豈に聖と爲り賢と爲らんと欲するに非ざらんや。豈に窮すれば則ち獨り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くせんと欲するに非ざらんや。今未だ以て兼ねて善くするの願いを遂ぐるを得ずと雖も、豈に以て獨善の約の如くす可からざらんや。願わくは君夙夜斯の約に負く無からん。心と約してこれに負かば、鏡に對して影を窺うに、必ずや其の面目に覩然たる者有らん。此れ卽ち我が心の責めなり。今世に纍纍若若たるは、決して我と秉周との徒手にて得可き所に非ず。幸いにしてこれを得ば、必ずや其の初心に負く者有らん。故に秉周の爲にこれを願わざるなり、と。秉周起ちて謝して曰く、約の如くにせん、と。遂に書して以て記と爲せり）

と言っていることで確認される。趙文のこの解釋は、實は誤りらしいのだが、小論ではそのこととともに、關連する問題についても些か述べることにしたい。

(一)

「約心」の用例は唐以前にはほとんど見當たらなない。『晉書』王導傳に次のようにあるのが、唯一の例と思われる⁽³⁾。

咸康五年薨、時年六十四、帝舉哀於朝堂三日、……冊曰、……惟公邁達冲虛、玄鑒劭邈、夷淡以約其心、體仁以流其惠

（咸康五年に薨ず。時に年六十四、帝は哀しみを朝堂に擧ぐることに三日、……冊に曰く、……惟れ公は邁達冲虛にして、玄鑒劭邈なり、夷淡にして以て其の心を約し、仁を體して以て其の恵みを流す）

「夷淡にして以て其の心を約す」とは、王導の爲人をいうものだが、この「約心」は、「心と約す」とは解せない。「約」とは「約束（制限する、制御する）」の意であり、平靜で感情に流されることのない王導の心の有り様をいったものと解される。

では、唐代はどうであるか。唐代においても「約心」の用例はそれほど多いわけではないが、まず擧げられるのは、『尚書正義』「甘誓」の條の「正義」に見える次の例である。

甘誓牧誓費誓、皆取誓地爲名、湯誓舉其王號、泰誓不言武誓者、皆史官不同、故立名有異耳、泰誓未戰而誓、故別爲之名、泰誓自悔而誓非爲戰、誓自約其心、故舉其國名

（甘誓、牧誓、費誓は、皆誓地を取りて名と爲す。湯誓は其の王號を擧げ、泰誓は武の誓いを言わざる者なり。皆史官同じからず、故に名を立つるに異なる有るのみ。泰誓は自ら悔いて而して戦いを爲すに非ざるを誓い、自ら其の心を約するを誓う、故に其の國の名を擧げり）

次いで、開元年間に活躍した張廷珪の上書（『舊唐書』本傳所載）には、

臣愚誠願、陛下約心削志、澄思勵精、考義農之書、敦素朴之道

（臣愚誠に願わくは、陛下心を約し志を削り、思いを澄ませ精を勵まし、義農の書を考べ、素朴の道を敦うせんことを）

とある。さらに、中唐初期の人、常袞の「授李深兵部郎中制」（『文苑英華』卷三九〇）にも、

經通以濟於用、廉介以約其心。

(經通にして以て用を濟け、廉介にして以て其の心を約す)

という。これを要するに、いずれも『晉書』の例と同じく「心を約す」と讀むべきであり、「約心」とは、感情や怠惰、欲望などに流れやすい心を制御する意と考えてよいだろう。

また、少し毛色が異なつて、傳奇小説の中にも「約心」の語が見える。李朝威の傳奇「柳毅」(汪辟疆校録『唐人小説』六七頁)に、

(妻) 對毅曰、……君附書之日、笑謂妾曰、他日歸洞庭、慎無相避、誠不知當此之際、君豈有意於今日之事乎、其後季父請於君、君固不許、君乃誠將不可邪、抑忿然邪、君其話之、毅曰、似有命者、僕始見君於長涇之隅、枉抑憔悴、誠有不平之志、然自約其心者、達君之冤、餘無及也、以言慎勿相避者偶然耳、豈有意哉

(妻) は毅に對して曰く、……君は書を附せし日に、笑いて妾に謂いて曰く、他日洞庭に歸らば、慎みて相避くること無かれ、と。誠に知らず此の際に當たりて、君豈に今日の事に意有るかを。其の後季父君に請えども、君は固く許さず。君は乃ち誠に將た可とせざるか、抑々忿然たりしか。君其れこれを話せ、と。毅曰く、命有る者に似たり。僕始めて君を長涇の隅に見るに、枉抑憔悴し、誠に不平の志有り。然れども自ら其の心を約せる者は、君の冤みを達せんとし、餘は及ぶこと無ければなり。以て慎みて相避くること勿かれと言える者は偶然のみ。豈に意有らんや)

とあるのがそれである。紆餘曲折を経てわが妻となつた龍王の娘に、初めて出會つたときから私に氣があつたのかと問われて、柳毅は、「あのとき自制したのは(自約其心者)、あなたの怨みを傳

えることだけを考へて、他のことは考へなかつたからだ。また出會つたら私を避けたりしないでくれと言つたのは偶々のこととて、他意はなかつた」と答へたのであつた。この柳毅の言葉に見える「約其心」が「自制する」意であるのは、柳毅がこの後で、

夫始以義行爲之志、寧有殺其壻而納其妻者邪、一不可也、善素以操眞爲志尙、寧有屈於己而伏于心者乎、二不可也

（夫れ始め義行を以てこれが志と爲せば、寧くんぞ其の壻を殺して其の妻を納るる者有らんや。一の不可なり。善く素より操眞を以て志尙と爲せば、寧くんぞ己に屈して心に伏せらるる者有らんや。二の不可なり）
と言つてゐることからも知れる。

以上、「約心」とはすべて「心を制御する」意であつた。「復志賦」の「約吾心」も、やはり「吾が心を約す」と讀み、「心を制御する」意と解するのが妥當であらう。趙文は韓愈の「約心」を誤解してゐたらしい。因みに、孫昌武『韓愈選集』（上海古籍出版社、一九九六）も、「約吾心、約束自己的心志」（四六七頁）と注してゐる。

（二）

さて、「復志賦」に戻ろう。「復志」とは、初志に歸るの意であるが、韓愈の初志とはどのようなものであつたか。それは、

昔余之約吾心兮、誰無施而有獲、嫉貪佞之汚濁兮、曰吾其既勞而後食、懲此志之不修兮、愛此言之不可忘

（昔余の吾が心を約して、誰か施す無くして獲る有らんと。貪佞の汚濁を嫉み、曰く 吾其れ

既に勞して而る後に食さん、と。此の志の修めざるを懲らし、此の言の忘る可からざるを愛す)

ということであつた。地位を得られなければ「獨善」に務めるが、一旦地位を得たからには「兼濟」に務める。士大夫たる者の處世はかくあるべきだということは、とくに中唐以後の士大夫の持つ意識であつたと言えようが、韓愈にとつての初志もそうであつたはずだ。ところが、官吏となるとややもすればその地位に安住して、士大夫としての初志を忘れがちになる。それならば「獨善」に務めるべきであると、韓愈は自らを戒めていたのである。

苟不内得其如斯兮、孰與不食而高翔、抱關之阨陋兮、有肆志之揚揚、伊尹之樂於畎畝兮、焉富貴之能當、恐誓言之不固兮、斯自訟以成章

(苟も内に其の斯くの如きを得ずんば、食らわずして高く翔くるに孰いず與れぞ。抱關もんばんの阨陋たるも、志を肆はしにするの揚揚たる有り、伊尹の畎畝に樂しむは、焉くんぞ富貴の能く當たらん。誓言の固からざるを恐れ、斯に自らを訟もとめて以て章を成す)

韓愈の「約吾心」とは、ともすれば安易な生き方に流される心を制御することだと考えられる。

そして、同じく中唐の人、孟郊の詩「靖安寄居」(四部叢刊本『孟東野詩集』卷四)にも「約心」の語が見える。

寄靜不寄華 靜に寄りて華に寄らず

愛茲嵒嶠居 茲の嵒嶠の居を愛す

(中略)

外物莫相誘 外物 相誘う莫かれ

約心誓從初 心を約し 誓いて初めに從わん

碧芳既似水 碧芳 既に水に似たり

日日詠歸歟 日日 歸歟を詠わん

「碧芳」は碧芳酒のこと。「歸歟」は『論語』「公冶長」の「子陳に在りて曰く、歸らんか、歸らんか、と」に據る。孟郊の場合は俗世の功名と歸隱とを對比しており、ともすれば「外物」に引きずられる心を制御して初志に歸ろうと詠うのである。そして、これまた中唐の人、白居易にはそのものずばりに「約心」と題する詩がある。いま全篇を引く。

約心

黑鬢絲雪侵 黑鬢 絲雪に侵され

青袍塵土澆 青袍 塵土に澆^{けが}る

兀兀復騰騰 兀^{こう}兀^{こう}たり 復た騰騰たり

江城一上佐 江城の一上^{じょうさ}佐

朝就高齋上 朝には高齋の上に就き

薰然負暄臥 薰然として暄^{ひざし}を負うて臥せ

晚下小池前 晚には小池の前に下り

澹然臨水坐 澹然として水に臨んで坐す

已約終身心 已に終身の心を約せば

長如今日過 長く今日の如く過ごさん

(朱金城『白居易集箋校』卷七)

元和十一年、四十五歳のときに左降の地江州で詠まれたもので、「閑適詩」に入れられている。白居易は兼濟のかなわぬ境遇に陥り、吏隱という立場にしか立ち得ないことを肯定しようとする。

それを表しているのが、「一生このように過ごしていくようにわが心をコントロールしたのだ」という末二句であろう。筆者は例の「興元九書」をいわば「閑適詩宣言」と見ているが、この「約心」はそれに通ずるように思う。

「約心」の宋代以前の用例は、おそらく以上ですべてであるが^⑤、韓愈、孟郊、白居易の三例では、制御する心の内容が他の例とはいささか異なっているようだ。それまでの用例では、「感情や欲望などの恣意に流されやすい心」を制御することを意味していたが、韓愈らの「約心」は「おのれの生き方がどうあるべきか、そのことに揺れる心」を制御することであつたと言えるのではない。中唐の士大夫たちの自己の生き方に對する思索の表現のひとつが、この「約心」であつたと思われるのである。

(三)

さて、宋代の「約心」はどのようなものであつたろうか。實は宋代の用例はきわめて少ない。管見に入つたのは二例のみで、ひとつは趙文と同じく宋末元初の人、林景熙の「洗心録序」(『霽山先生集』卷五)に見える。

上焉者、不待勸戒而自爲善、下焉者、雖有勸戒而不能已其爲惡、將使觀是錄者、洗其不善之心、而復其本善之心、其爲中人設乎、吾能約心而致謹於善惡所自出、中人以上者也

(上なる者は、勸戒を待たずして自ら善を爲し、下なる者は、勸戒有りと雖も而も其の惡を爲すを已む能わず。將に是の錄を觀る者をして、其の不善の心を洗いて、其の本善の心に復さしめんとするは、其れ中人の爲に設くるか。吾能く心を約して謹しみを善惡の自りて出づる所に致すは、中人以上の者なり)

もうひとつは南宋の姜特立の五絶である。

寄方叔游法輪寺三首 其三（『全宋詩』第三十八冊）

境靜約心兵 境 靜かにして 心兵を約せば

無由起妄情 妄情を起こすに由無し

擬將笙笛耳 笙笛の耳を將つて

同聽夜泉聲 同に夜泉の聲を聽かんと擬す

「心兵」とは、『呂氏春秋』「蕩兵」に、「察兵之微、在心而未發、兵也、疾視、兵也、作色、兵也、傲言、兵也云云（兵の微なるを察するに、心に在りて未だ發せざるは、兵なり。疾視するは兵なり。色を作すは兵なり。傲言は兵なり云云）」とあるのに基づき、韓愈「秋懷詩十一首」其十には「詰屈避語穽、冥茫觸心兵（詰屈として語穽を避け、冥茫として心兵に觸る）」とある。

「洗心錄」の「心」と姜詩の「心兵」は、いずれも韓愈らの「約心」における心ではなく、『晉書』等の「約心」における心に通ずる。どうやら宋代の士大夫たちは韓愈らの「約心」は受け繼がなかったようである。ところが、宋人の詩の中には次のような表現も見える。まずは王禹偁（九五——一〇〇一）の例を挙げよう。

老態

白髮不相饒 白髮 相饒さず

秋水生鬢邊 秋水 鬢邊に生ず

黑花最相親 黑花 最も相親しみ

終日在眼前 終日 眼前に在り

老態固具矣 老態 固より具われり

宦情信悠然 宦情 信に悠然たり

唯當共心約 唯だ當に心と約すべし

收拾早歸田 收拾して早く歸田せんと

(『小畜集』卷五)

王禹偁は、末二句において、早々に歸田することを「心と約そう」と言う。どうやら「心と約す」の意は、「約心」ではなく、「共心約」のように「介詞+心+約」の形で表されるようなのである。同様の例は沈遼(一〇三二—一〇八五)の詩にも見え、その「送智印師還會稽」(『全宋詩』第十二册)には、

吾已與心約 吾は已に心と約せり

行當宅榆粉 行々當に榆粉に宅すべしと

とある。「榆粉」は「粉榆」に同じく故郷の意。この二句の趣旨は王禹偁の例と同様であるが、「共」の代わりに「與」が用いられている。さらに興味深いのは、王禹偁と同時代の晁迥(九五—一〇二四)に次のような例があることである。

擬白樂天遣懷

義和走馭趁年華 義和 走馭して 年華を趁い

不許人間歲月賒 人間 歲月の賒かなるを許さず

春正豔陽春即老 春は正に豔陽たるも 春は即ち老い

日方停午日還斜 日は方に停午なるも 日は還た斜めなり

時情莫測深如海 時情 測る莫く 深きこと海の如く

世事難齊亂似麻 世事 齊め難く 亂るること麻に似たり

已共身心要約定 已に身心と約定するを要せり
古今如此勿驚嗟 古今 此くの如し 驚嗟する勿かれと

(『全宋詩』第一冊)

第七句は、單に「心」ではなく「身心」、「約」ではなく「要約定」となっているが、その基本構造は王禹偁や沈遼の例と同じである。そして、この詩で注目すべきはその詩題「擬白樂天遣懷」である。晁迥は白居易の「遣懷」に擬したと言っている。となれば、白居易の詩を見ねばなるまい。

遣懷

| | |
|---------|---------------------|
| 羲和走馭趁年光 | 羲和 走馭して 年光を趁い |
| 不許人間日月長 | 人間 日月の長きを許さず |
| 遂使四時都似電 | 遂に四時をして都て電に似さしめ |
| 爭教兩鬢不成霜 | 爭で兩鬢をして霜を成さざらしめん |
| 榮銷枯去無非命 | 榮の銷えて枯れ去さるは 命に非ざる無く |
| 壯盡衰來亦是常 | 壯の盡きて衰え來るは 亦た是れ常なり |
| 已共身心要約定 | 已に身心と約定するを要せり |
| 窮通生死不驚忙 | 窮通 生死 驚忙せずと |

(『白居易集箋校』卷十七)

晁迥の第七句は、白居易の第七句をそのまま使っていたのだった。そして、この詩が江州司馬時代の作であり、同時期に白居易には「約心」と題する詩もあつたことは留意すべきだろう。そこ

で改めて動詞「約」の用法を考えてみれば、「約＋目的語」の「約」は「制御する、コントロールする」の意の動詞として使われているのであり、「介詞＋目的語＋約」となつて始めて「約束する」の意となるのだ、と考へてよいだろう。白居易の「效陶潜體詩十六首」其十一（『白居易集箋校』卷五）に「心與口相約、未醉勿言休（心は口と相約せり、未だ酔わざれば休むを言う勿かれと）」と言うのを見れば、この見方は恐らく誤りないと思われる。しかし、趙文は「約心」も「與（共）心約」も同じと理解していたらしい。ただ、それが彼の個人的理解であるのか、あるいは時代共通の理解であるのかは、容易に判断できる問題ではなさそうである。

おわりに

以上、「約心」の語義については一定の結論を得ることができたと思うが、より重要な問題は、韓愈、孟郊、白居易という中唐期を代表する詩人たちにおける「約心」の内容であるように思われる。とりわけ、白居易の「約心」詩は、江州左降期における彼の思索の有り様に深く關わるようだ。白居易における「心」、さらには「心」と「身」の關係については、また別に考えたい。

（注）

- （1）四庫全書本『青山集』は「孰與」を「孰有」に作るが、「復志賦」の原文に従う。
- （2）原文は「愈既從隴西公平汴州、其明年七月有負薪之疾、退休于居、作復志賦、其辭曰」。
- （3）『宋書』孝武帝紀に、

（大明四年夏四月）丙午詔曰、……朕綈帛之念、無忘于懷、雖深詔有司、省游務實、而歲用兼

積、年量虚廣、豈以捐豐從損、允稱約心、四時供限、可詳減太半

とあるが、この「約心」の意は解しにくいので、しばらく除外しておく。ただ、「心と約す」の意ではないだろう。

(4) 『唐人小説』によれば、貞元元和の間の人であろうという。

(5) たとえば、『法苑珠林』卷七十三「業因部」に、「第二約心者、結罪由心、業有輕重、如瞋重則罪重、瞋輕則罪輕（第二約心なる者は、罪を結ぶは心に由ればなり。業に輕重有りて、瞋り重ければ則ち罪重く、瞋り輕ければ則ち罪輕きが如し）」とあるように、佛教や道教關連の文獻にも「約心」の用例がいくつも見出されるが、小論では除外した。ただし、その意は、やはり感情、欲望などを制御することである。

(6) 晁迥の現存作品は少なく、『全宋詩』にはわずかに五十六首を収めるのみであるが、そのなかに白居易に擬した詩が多數見られる。

(7) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』、『白居易集箋校』ともに元和十三年の作とする。

(8) 晩唐の高駢の七絶「寫懷二首」其二にも、

花滿西園月滿池 花は西園に滿ち 月は池に滿つ

笙歌搖曳畫船移 笙歌 搖曳して 畫船 移る

如今暗與心相約 如今 暗かに心と相約す

不動征旗動酒旗 征旗を動かさずして 酒旗を動かさんと

とある。